

2019年度 地域課題解決調査研究事業

多機関連携による南相馬市の  
子ども支援体制の構築(PHASE1)

報告書

2020年5月

大阪大学  
伊藤駿

## 目次

1. 調査の背景.....	2
2. 調査の概要.....	2
3. 支援に関わった学生の所感.....	4

## 1. 調査の背景

本調査は、昨年度採択された地域課題解決調査研究事業の結果を受け、大学をはじめとする訪問者と市内の施設等が連携をし、南相馬市内の子どもたちの支援体制を構築していくことをめざし、実施した。昨年度の成果は、すでに報告書としてまとめられているため、そちらを参考いただきたいが、市内を訪問するきっかけなどの多くが東日本大震災以前から南相馬市と縁があったというものであった。そのため、多機関による連携が可能な子ども支援体制を構築することによって、新たに訪問を検討している大学などが南相馬市に訪問するきっかけづくりになるのではと考えた。また、すでに訪問している大学からは、複数の大学が連携することを通して、子ども支援を拡張していけるのではないかと、という声も聞かれていたことから、2019年度はその緒となる調査事業を行うこととした。

具体的には、大阪大学と研究代表者が学部生のときから関わりのある NPO 法人日本教育復興連盟、そして南相馬市内の生涯学習センターや学校現場が連携し、子どもたちの支援体制を検討していくというものである。また、これまで2年にわたり大阪大学では本調査事業に採択されており、そうした中で得られた知見を学会等で交換し、ひいては南相馬市が有する復興大学事業などを広く大学関係者に認知していただく機会も模索した。本報告書では、前者の多機関連携に基づく支援体制づくりの概要を示すとともに、実際に支援に関わった学生の所感を掲載することとする。

## 2. 調査の概要

本調査では合計4回、南相馬市を訪問する予定であった(表1)。しかし新型コロナウイルスの流行に伴い4回目の学校ボランティアを実施することはできなかった。

日時	訪問先(具体的活動)	訪問人数
7月6日～8日	双葉屋旅館(南相馬市内全域のフィールドワーク。小高地域の方々に対するインタビュー調査。) 南相馬市復興企画部(昨年度の調査に関する意見交換)	26人
9月12日～14日	双葉屋旅館(7月の訪問に関する振り返りと学生の学びに関する意見交換)	2人
1月3日～7日	双葉屋旅館(旅館スタッフの方からの聞き取り活動) みなみそうま復興大学(スタッフの方	10人

	からの聞き取り活動) 南相馬市防災センター(見学) 原町生涯学習センター(子どもたち に対する学習支援活動。100名の子 どもが参加)	
3月7日～15日(中止)	原町第一小学校・鹿島中学校(学校 ボランティアの実施)	中止

本来であれば、3月の学校ボランティア活動を通して、子どもたちの困り感や学校現場に対して外部の人間がいかに貢献できるのか、ということを検討し、まとめていく予定であった。この点については、新型コロナウイルスの流行に落ち着きが見られるなど、次回の訪問の目処がたった段階で依頼をしていきたいと思う。

しかしながら、1月の訪問ではのべ100名を超える子どもたちに対する支援活動を実施することができ、また夏休みの継続を希望する声も聞かれた。また次頁で紹介していく学生の所感からも、様々な学びの機会になっていることは間違いなく、2020年度以降も活動を継続していきたいと考えている。

### 3. 支援に関わった学生の所感

本調査活動の中で、南相馬市を訪問した大学生は、活動実施ごとにそれぞれ振り返りを行い、支援活動などを通して学んだことや感じたことについて所感をまとめている。その中から一部抜粋して、以下で紹介する。

震災から 8 年以上が経った今、小高がぶちあたっての現地の問題点や現状についてどうお考えになっているのかについてもお話を伺うことができた。様々な問題点の中でも、震災前に小高を支えていた若者たちや子どもたちの減少は、かなり厳しい状態であるということが改めてわかった。生活していくためにはお金が必要で、そのお金を稼ぐための仕事が高小には今ない、という現状を半ばあきらめたような表情で語るおじいちゃんの姿を見て、何も解決策が思いつかない自分へのもどかしさを感じた。現地の人と直接話すこと、テレビ画面やインターネットを通してではなく直接見に行くこと、自分事として考えることなど、「直接」、「自分事として」ということの大切さを感じた。それを意識することで、新しい学びがあったり、深まっていくことがたくさんあった。

小高の方へのインタビューでは、「自分の故郷が忘れ去られる」ことへの不安、「小高で元気にやってるよ！」というメッセージを同級生ら小高を故郷とする若年層に伝えられたらという想いで小高に帰還されたということをお伺いしました。戻ってきている人たちがどういう想いで帰還しているかということについてはまったく知らなかった私にとって、今回のこの出会いやお話を伺えたことは大きな学びになったと感じています。

震災を語り継いでいくということの大切さが必要だと思いました。もう震災から 8 年以上が経ち、世の中の人たちの震災への記憶は薄れかけている面もあると思います。ですが、もう二度とこのような被害を出さないためにも語り継ぐ、本当は何があっても、そこにいた人たちはどのような思いで過ごし、今に至るのかを知る必要があると再度感じました。小高という土地や雰囲気を知る際、ネットやチラシなどで大まかなことは知れたけど、実際に話を聞くことでしかわからないことはいっぱいあったし、なによりそこに住んでいた人たちが復興しようとしている人たちの思いが知ることができる。

この学習支援で一番私の中で印象に残っている子が小学四年生の女の子で、算数が嫌いと言っていた子だ。いつから嫌いなの？どんなところが嫌いなの？といくつか質問してみると、ある原因を答えてくれた。「3年生の時学級崩壊して授業を受けられなかったから」と。先生は注意するけど誰も聞いてない、周りがうるさくてそっちに気を取られて集中できない等色々話してくれた。確かにその子のやっている算数の冬休みの宿題(割り算)と、現段階での算数の理解度が大きく異なっているのが気になった。このわからない、出来ない状態のまま授業だけが進んでいってしまうことを考えたら確実に良くないし、なんとかしてあげたい気持ちになったが、なんて声をかければいいのかもわからないし何もできない自分にもどかしく感じた。小学2年生の子に「大学生の遠足はどこに行くの？」という素朴でなんだかかわいい疑問を投げかけられて、南相馬で生活している子供達にとって大学生って未知の生き物のようなものなんだと改めて実感した。学習支援中、子供の普段の様子を聞く事を意識していたけどもっと自分や大学生、東京とかいろんな事を話せばよかったと反省している。南相馬市の子供達は幼少期に様々な制限を受けていたことから大きくなってからの積極性に欠けると言うのを聞き、子供達が自主的に物事に取り組める場の提供や、自分たちは様々な可能性を持っているという事に気づいてもらえるようなサポートを行うことの重要性を感じた。

インタビューの中では、特に街と人について、印象的なお話がいくつもありました。「避難指示の解除は特別なことではなく、それまでは住む場所などの選択肢になることのできなかった場所が選択肢のひとつになっただけ」というお話、「小高はだんだん仕事をする・住む場所という段階へきている」というお話、「“被災地仕様”ではなく、1つのもの・製品を見る目で商品を見て買ってほしい」というお話…。これらは全て、小高が再び人々の生活の場となってきているという意識や、これからもそうあってほしい、そうあるためには・・・という想いから出てきた言葉なのだろうと思いました。心に残ったのは、「色々な人がいるのが街」という流れでしてくださった、犬を散歩している人を見たときの喜びや暴走族が走るようになった時の喜びについてです。場所としての街に人がいる風景になることで生活の場所になっていくのだという、人がいるということへの想いを強く感じました。

お聞きしたお話の中でも、自分の中で特に心の中に残っているものは被災地に対する思いの在り方についてのお話です。被災地について、マスメディアが読者や視聴者を引き付けるために話を誇張したり、情報を作ったりするということを聞きました。このことも私の固定概念を作り上げた一つの要因なのかもしれません。お話を聞いていて、このことも影響しているかも知れませんが、やはり現地の人と認識のずれがあるなと思いました。今も必死に元の生活を取り戻そうと努力されている方たちにただ同情するのではなく、共に前をむいて応援したり、時には復興に関して考えたりするのがよいと思いました。

震災後 8 年経った今でもどのような困難を抱えているのか、を知ることができました。また、それらの問題がどこか他人事に感じていたことが他人事とは思えなくなりました。自分がそれに対して直接できるアクションは、残念ながら今は思いつきませんが、考え方一つで何事も変わるなどは感じました。